

第2回委員会 会議録（要旨）

日時：令和5年8月7日（月）13：00～15：50

場所：市役所本庁舎2階1号会議室

出席委員：阿知良委員長、武田副委員長、今泉委員、松永委員、沼田委員、木下委員

欠席者：なし

事務局：中野地域生活課長、青山市民生活係長、西村主査

【開会】

地域生活課中野課長挨拶

【選考会】

《市民提案型協働事業》

○鉄と光の芸術祭2023

●申請事業プレゼン

- ・団体は2020年の大黒島でのレーザーアートのプロジェクトからスタート。アートと街のコラボを通じた新たな魅力発信によりム室蘭の未来を文化で開く、新しい文化地図を作り上げていくことを目的としている。
- ・事業内容としては、旧絵鞆小学校の体育館等をメインに据え、旧絵鞆小学校が持っている縄文、日本遺産炭鉄港、というテーマを加えて実施する。
- ・具体的には縄文太鼓と題した独特の音楽演奏者によるパフォーマンスや炭鉄港のストーリーである室蘭と産炭地を結ぶアーティストの参画を予定。

●質疑応答

- D委員：予算では事業費は280万円のうち、広告協賛が105万円を見込んでいるが、これは現実的な数字なのか、これまでの実績からみてどうか。
- 団体：初年度の大黒島はクラウドファンディングで行い、目標額100万円に対して140万円ほど集めて実施。それ以降も協賛金として100～120万円集まっており、今回も同様の金額を集めることを計画している。
- E委員：市内だけじゃなくて、全道から来てもらっていいイベントだと思うが、市外に向けた宣伝はしているのか。
- 団体：札幌のメンバーを中心に、札幌のアーティストが集まる場所でのポスターの掲示やフライヤーの配布、アーティスト仲間のつながりでPRしている。
- F委員：意見だが、今はイベント期間作家さんの作品を展示して終わったら戻すという形で、イベント終了後は市民の目に触れることがなくなってしまうが、今後の方向性として、例えば市内の高校の美術部からの作品を提出してもらおうとか、著名な作家の作品の場合も、イベント終了後も作品を室蘭に残すような了承をいただいて一つずつ街の中にアーティスト作品が増えていくという取り組みなどで、期間に来られなかった市民の方にもここにあるんだ、ここにも増えた、というふうに市民の意識を広げていければいいと思う。

B委員：市外への広報は伺ったが、室蘭市民への広報をかけて、これは自分たちのまちのイベントなんだ、とわかってもらうことが必用。また、地元商店街に対しても、なかなか店舗を開いてはくれないかもしれないが、働きかけをして商店街も潤うような方向で力をいれていただきたい。また、アート興味がある方だけに限らず一般市民にもきてもらって、室蘭市内を楽しんでいただく、という広がりをもてるといいと思う。

団 体：アートに興味のある方は第1ターゲットだが、関心のない人にもこのイベントをきっかけに関心をもってもらえるのも大事と考えている。ご意見のとおり一般の方への周知度をあげて実施したい。市内の人に関してはイベントを手伝ってもらう形で関わってもらえればという考えもあり、広報でもボランティアを募集しているところ。できるだけ沢山の人を巻き込みながら一緒にやっていけたらと考えている。

C委員：室蘭は工業都市のイメージをもたれるが、その中で文化をとりあげてもらえてありがたい。絵鞆小学校を拠点にした発信に期待しているし、今後も室蘭における文化がどうものかというのを市民に見えるような形でやってもらえると嬉しい。

団 体：その気持ちで取り組んでいきたい。

A委員：室蘭在住スタッフがどう活躍するのか、また、イベント後室蘭に残るものはなにかについて、もう一度考えをお聞きしたい。

団 体：室蘭側のメンバーの活動部分としては、市内の市民活動団体とのやりとり、市内向けのPRやフライヤー配置など。人手不足を感じているので一緒に主体となって関わってくれる仲間をこのイベントを通じて増やしたい。室蘭に残るものとしては、作品が残る形が望ましいが、美術館のスペースの問題もある。商店街や空き店舗においていただく可能性や、作品関連グッズを販売するなどできるだけ一時的なもので終わるのではなく長く市民の目に触れる形を考えていきたい。

○嚥下調整食・ケセラ食地域普及事業

●申請事業プレゼン

- ・嚥下障害は高齢者はもちろんだが、半身不随などの障害においても、手や足だけではなく喉も動かなくなるので、決して高齢者だけでなく幅広い方が対象となる。
- ・現状において飲み込みづらいものを飲み込みできるための食事＝嚥下調整食は介護専門職員の人だけが提供しているというのが現状。家族の中で嚥下調整食を作るといっても離乳食のようなものになってしまう。
- ・そして障害を持っている方と一緒に暮らす家族は、障害の人たちと一緒に食事を囲むことができなくなっている。歯ごたえのあるもの、おいしそうなのを家族が食べていて、障害者の人たちだけはドロドロとしたものを食べるのが申し訳ない思いから食事を囲む場すら分けてしまっている家族が多い。それをどうにかしたいという思いから、見た目と一緒に、でも飲み込みやすい、家族も一緒に食べられるというものを開発し、少しでも嚥下障害に理解を深めてもらえるようにしたいと思い事業を企画した。
- ・活動内容としては、嚥下食の試食会、勉強会、講習会など一般の人たちと障害者を持つ家族、管理栄養士や言語聴覚士など専門職の方、歯科医師さん、脳外科の方など広いネットワークを作って情報交換や連携をとって介護を楽に進めていきたい。

・また、広くレシピなどの情報をオープンにして、一般の方たちには極力持って帰って家族に食べさせてあげているような活動をしていきたい。

●質疑応答

D委員：パンフレットを配るほかにホームページへの公開もして、より多くの人にきっかけを作ろうという考えはあるか。

団 体：その考えはある。ゆくゆくは、嚥下食に理解のある飲食店や介護施設などをマップに掲載していきたいがシステムへの登録に費用もかかるものなので、今後組織が大きくなっていけば視野に入れていきたい。

F委員：初年度でパンフレットはすごく必用だと思う。費用として今回20万を計上しているが補助がなくなったとしたら、今後のパンフレットを作らないのか。それとも別で資金を集めて作っていくのか。

団 体：情報の発信は定期的には必要だとは考えているが、初年度だからこそしっかりしたものが必要と考えている。その後は情報が途切れることがないようにするのが大事であって見栄えは重要ではない。補助がなくなるとしても会費や他の施設からの協賛金などで賄いたい。

D委員：嚥下食を広めてほしいという需要って結構あるものか。こういう活動を始めたのは、介護の現場から声があがったからとか、身内にそういう方がいたからとか、どういったところから始まったのか。

団 体：自分は施設で働いているが、イベントのお食事の日というのは自分たちにとっては戦々恐々としている。自分のキャリア20年で、行事食を食べて2人目の前で亡くなっている。その度に思っていた、なぜ、ただおいしいものを食べようと思っただけなのに、という思いを相談したらじゃあ作ろうかとなったのがきっかけ。ニーズとしても、札幌で行われた介護展示会でも、食ブースの8割は嚥下食をテーマに設けられ注目を浴びている。

F委員：北海道内で同様に飲食店も一緒に嚥下食を普及させる活動をしてる自治体、地域はあるか。

団 体：知っている中では道内にはない。ほぼ介護施設だけの中だけで、食事に工夫されているところはあるが、飲食店と介護職、管理栄養士などとネットワークを組んでいるところは北海道ではない。全国的には何か所かあると思う。

C委員：嚥下というものに関して、誤嚥性肺炎という言葉は良く聞くが、嚥下調整食は施設の中だけの話かと思っていたが、今企画は一歩進んだ形の健常者と一緒に食べていけるための足がかりという形であり、非常にいい方向に進んでいると感じる。ただ、資金的な面で、今後心配な部分がある。

団 体：資金的な部分だと飲食店をどんどん巻き込んでいきたい。このケセラ食の考えが広まれば参加してくれる飲食店も増えると思っている。

嚥下機能低下による誤嚥性肺炎に関しては、以前は自分もただ柔らかければいいなら茶碗蒸しでいいと思っていた。でも、茶碗蒸しをそのままあげると口に入れた途端に固形物と水に分離してしまい、その水が肺に入り込んでしまう。このため茶碗蒸しだったらとろみをつけるべきとか固い茶碗蒸しにしなきゃいけない。そういう知識がないがゆえに、昔はそういうところで誤嚥性肺炎ですとか、死亡

事故というものにつながったんだと思っている。自分も専門職の方と話を聞くまで知らなかった。ただ柔らかければいい訳ではなく、喉を流れるスピードをゆっくりとさせてあげること、舌や歯、口を動かすことで筋肉が発達するのでただ流すだけではなく筋肉を維持させる動きも加えなきゃいけないなど専門の方から教えてもらって、これは自分たちの中だけでとどめとく技術ではないなと思った。これから室蘭だけに限らず高齢化率が高くなる。高齢者とか障がいのある方、半身不全の方でも食に優しい室蘭になればそれこそ高齢者のインバウンドになるかもしれないという思いがある。

B委員：室蘭だけではなく日本全国にも関わることだと思うので、そういった取り組みをパンフレットだけでなくニュースなど影響力の強い広報活動をやっていたらいいと思う。そうすることで、協賛金などにもつながっていくと思う。

団体：この前、NHKで5分間くらいの特集を組んでいただいた。そのほか、自分たちが出演している地元コミュニティFMの番組内でも嚙下食のことについても話させてもらっているが今後事業が発展すれば、新しく増えた仲間をゲストに迎えて話すこともできると思うし、室蘭民報でも嚙下食について何回も取り上げてもらっているのだから、これらを継続して、メディアで見て目で見て資料を手にとってその場に足を運ぶという流れを作りたい。

A委員：事前に連絡すれば取り扱ってくれる店舗について、飲み込みに責任を持ってくれる人の同伴の有無や金額の程度はどれくらいなのかなど決まっているのか。

団体：もう少し固まってからになるが価格帯は店舗で差がでないようにしようと思っている。つきそいについては今のところは栄養士など専門職の同伴がベストと考えている。

○みんなのおうち かあちゃん家

●申請事業プレゼン

- ・3年前に団体を立ち上げたが、コロナ禍によりこれまで地域食堂が実施できなかった。貧困世帯や共働き世帯の子どもたちの居場所にしたい。また、子どもだけでなく、独居の高齢者を含め全ての人にとっての繋がりができる場所にしていきたい。
- ・食べるだけでなく、勉強や遊びを取り入れた居場所にしたい。
- ・メンバーには大学教員をしている者がいることから、食堂ができない3年間は、大学生の学習ボランティアによるウェブ寺子屋という形で子どもたちの宿題を教えてあげたり、ネットでコミュニケーションを図る活動をしてきた。
- ・子どもたちにも人とつながるという意味で良い影響があったが、学生達にとっても子どもたちの疑問に真摯に答えなければならぬため責任感が生まれるなど相互に色々なことを学び合うというような場となっている。
- ・最近では会うこともできるようになってきましたので、食堂の中でこれらの活動を地域の方と一緒にやるということにとっても意義を感じている。

●質疑応答

F委員：大学生の学習ボランティアさんをお願いしているということだが、交通費を含め全くの無報酬ということか。

- 団 体：そのとおり。基本的には大学の周りに住んでいる人が多く、活動場所は同じ東明地区のため自転車又は歩いて来れる距離のため交通費もない。
- F 委員：同じ地域に知利別の方でクルハウスという子ども食堂と学習支援をやっている団体があるが、そことの棲み分けはあるか。
- 団 体：その団体とは地域的には一緒だが、対象としている小学校も中学校も学区が別になるため、取り合いのようなことにはならないと思う。
- D 委員：運営のイメージとしてはお昼ご飯を食べに来てもらってそのまま勉強をみんなでしましょうみたいな感じかそれとも企画が中心で何月、何月にどういう企画をするんで、みんな集めましょうみたいな形なのか。
- 団 体：食事を作る過程での体験をさせたりなど食事を主とした事業運営となる。勉強も必ずするものではなく、希望がある子に対応する形とする予定。
- D 委員：スタッフだが、広報隊や学び隊など多岐に渡って活動をするようだがこれからメンバーを募ったり組織を広げていく計画はあるか。
- 団 体：結構人数は増えている。学生たちもこのような世の中だったので、いろいろやりたい意欲のある子たちが増えてきている。
- E 委員：協賛金 105 口集めるのは大変だと思うが実際は募れそうか。
- 団 体：3 年前の立ち上げからこれまでちょっとずつ声掛けをしている中で手応えがある範囲で計上した。
- B 委員：この補助金がなくなった後はどのように事業を継続していくのか。
- 団 体：今後この補助金が減っていくことは分かっているので、その他の助成を探るだけでなく、この先は自分たちで何かの形で収入を得る方法を考えたい。
- C 委員：会場のわかば会館は最近新築した会館だが、食堂に適した厨房設備はあるのか。
- 団 体：まだ古い会館の頃から相談させていただいて、新築設計の時点で食堂を見込んだものにしていただいていた。
- C 委員：子どもから大人まで対象とのことだが、幅が広いというのはいいようだけど、実際お互いにつながるのは難しいことでは。
- 団 体：せっかく来ても別々だと意味がないので。そこを取り持つような、子どもと一緒にオセロなどをとっかかりとしてちょっとずつ一緒に何かをやるところから始めたい。
- A 委員：子どもに周知するにあたって回覧板など町会さんとのやりとりはどうなっているか。
- 団 体：町会には月の予定表を回覧板で回していただいたりとか、小中学校の校長先生の所にも配布物をお願いに行く予定。
- A 委員：大学生の手伝いをお願いするときに、大学生にとっても意味があるとよく聞くが、これだけ具体的にちゃんと大学生の育ちを活動の中に位置づけているのがすごい大事だなと思っていて、ちゃんと大学生が変わっていくところを、活動の中で大事にさせていただけたらなど、それがすごい強みだと思う。
- 団 体：私自身も個人的に子どもを研究室に連れて行ったりした際、工大の学生と触れ合うことでお互いいろんな刺激を受け合っているのを感じる。
以前小学生がお味噌汁って何で真ん中に白いのが集まるの?という質問をして大学生が誰も答えられず、必死にみんな調べて小学生が分かるように説明して

くれたことがあった。そういう興味を持ったりとか調べたりとかいろんな影響を与え合うことを実感しているので頑張りたいと思う。

○FEELD GOOD SECOND MURORAN CAMP

●申請事業プレゼン

- ・室蘭市が人口減少や高齢化など衰退してきていると言われる中でもパワーを持った青年はいる。そういった人を集めて、自分自身が生まれ育った室蘭で今までなかったイベントや試みに挑戦したいという思いで団体を設立した。
- ・コロナ禍から大流行しているキャンプ、アウトドアというコンテンツに注目し、室蘭市のシンボルである白鳥大橋のふもとでアウトドアイベントを行うことで、室蘭市のポテンシャルを存分に参加者へ味わってもらおう。また、キャンプをするだけでなく、市内の企業や室蘭市の関連施設を全道や全国へPRする企画やSDGsの観点から、関連団体と協力してイベント終了後には会場内周辺のごみ拾い活動も実施する。

●質疑応答

D委員：委託料や手数料の内容は。

団 体：委託費については、約1万人規模の大きなイベントであることから、会場の設営やステージ設置、音響、会場給配水など専門業者でなければ難しい部分を委託している。手数料は主に会場ステージの看板製作費。

F委員：看板制作は地元の業者に依頼するのか。

団 体：今回この看板は特殊な形状の看板のため、地元の業者では対応が難しいため他市の業者をお願いしている。

F委員：理解したが、室蘭市の補助金で実施する事業なのでなるべく市内にお金が落ちるように工夫をしていただければと思う。

団 体：検討する。

F委員：室蘭でのフェスと札幌の方で行われてるフェスとの関係を教えて欲しい。また、去年はアンケートでもイベントを知ったきっかけが知り合いかSNSという人が多いようなので、今年はぜひ大々的に行って欲しい。

団 体：自分たちのフィールド・グッド・セカンド・ムロランキャンプというのは、先にフィールド・グッド・フェス北海道というのが石狩市で行われており、その主催団体とたまたま知り合いになって室蘭市にすごくゆかりのある人だったことから自分も何か室蘭でできないか相談した所、フィールドグッドフェスのスピノフ的な位置づけで実施することになった。その際、石狩と同じくやっても面白くないので、「セカンド」とした。セカンドにはフィールドグッドフェスのもう一つの意味と、フリーマーケットを掛け合わせており、自宅で眠ってしまっているキャンプ道具を次に始める世代につなげるというのが、もう一つという意味のセカンドになる。なかなか金額が高いキャンプ道具を買えないので使っていない人から次の人にとというような、昔だったら、お父さんのキャンプ道具を息子にとかというような流れを室蘭で作ればと思い企画した。

C委員：昨年の報告を見ると、協賛にも特別協賛やABCなど種類があるのか。

団 体：協賛の仕方がすべてお金というわけではなくて、例えば給排水設備をやってもら

ったり草刈りの協力というのもあったりというのもあっていろんな種類がある。
今年も同じような形でやる予定。

B委員：予算で北海道からの補助金が計上されているが去年はなかったのか。

団 体：去年も補助を受けているので今回2回目となる。ただ、今年は事業内容を拡充、規模も拡大しつつ予算は抑え昨年並とした。内容としてはキャンプできる人数を100人だったのを150人に増加、新たな取組みとしてムラサキスポーツさんの協力によるストライダーという子供の小さな自転車の大会の開催などをする予定。

B委員：なかなか大変だと思うが、そうやって新しいことをやっていくと、毎年面白いことが新たに出ていいと思うので続けていただきたい。

A委員：感想として、実行委員会のメンバーがとても大事だなと思っていて、このメンバーが今後もきちんとまちづくりを楽しんでやっていける体制というのを是非重視してもらいたいと思う。このイベントがまちに発展効果があるということはすごく分かるしそれもすごく重要だが、やってる側がやりがいを感じて、みんなで充実していけるような部分も重視してもらえるとすごくいいと感じた。

○ファシリテーション講座

●申請事業プレゼン

- ・会議やミーティングを円滑に進める技法であるファシリテーションのマインドとスキルを市民が習得することでコミュニティ活性化を図り、地域課題に主体的に取り組みながら、様々な世代や立場の方々と対話の場を作り、良いまちづくりにつなげることを目的とする。
- ・会議中の話が脱線したり論点がずれてきたときに適切に軌道修正したり発言しやすい雰囲気を作ることで新たなアイデアが出やすくなるファシリテーションを学ぶことは会社や団体活動だけでなく、様々な世代や職種、スキル、生活スタイルの異なる人達とのまちづくりの話合いの場でも重要。
- ・内容としては11月26日ミンクール講座を午前と午後に分け、午前は入門講座、午後はより濃い内容の会議の開発やファシリテーショングラフィック（板書技術）の講座を行う。

●質疑応答

E委員：会員が講師になって団体や学校へ出張講習などは考えているのか。会社から依頼を受けて事業になったりできるのでは。

団 体：自分たちも入門編は学んでいるところだが、指導するところまでは至っていない。将来的にこの会が育っていけば、そういう市民ファシリテーターとして活躍できるような人材もできたらいいなどはと考えております。

また、会議でファシリテーターをできるようになるとファシリテーションの技術を教えるのはまた別に学ぶ必要がある事なので、まずはファシリテーションのマインドを広めて、その後、ということでもまだまだ時間がかかる。講師になるということは視野には入れたい。

C委員：ファシリテーションについて会議を円滑に進めるということで確かに重要では

あるが、一般の人にしてみたらなかなか飛びつきにくいように感じる。

団 体：確かにその通りで関わってなければ知らないと思うので、講座でも毎回入門編は必ずやって、その後に今回はこの部分を盛り下げるといった感じで一気に詰め込まないようにするつもり。少しでもこのファシリテーションのマインドを理解してくれる人を増やしていったら、その人たちがいろんな活動の中でファシリテーター的なことをチャレンジしていったらと思う。

B委員：団体概要で、団体設立の目的とが、会員がファシリテーションを学びあい、となっているが、会員だけがファシリテーションを学ぶのか。

団 体：会員に入っていたきたい思いはあるが、もちろんこの講座自体は一般の方を対象としている。

B委員：講座開催に関する告知はどのようにするのか。一般の方に広く周知できるか。ぜひ問題解決したい人に届く告知をお願いしたい。

団 体：告知は市の広報と新聞報道依頼をして、FMびゅーにも依頼をする。また、今後市民活動センターに登録してそちらでも告知したい。また、公式LINEも作り、今まで参加してくれた方にはお知らせをして、参加して良さを知った方がお友達を連れてきていただくという口コミもしていきたい。

A委員：地域課題解決との関連だが、これはファシリテーションの技術を学ぶ場なのか。その場でいろんな課題解決のアイデアを出していく場なのか。

団 体：ファシリテーションを学んだ後に模擬会議を必ずしており、その時に、身近な課題を議題にして話し合っている。前は旧大沢小学校の活用法。その前はFMびゅーを盛り上げるためにはどうすればいいかという議題でアイデアを出し合い、結果をまとめて対象団体に渡したりしている。まずはそういう小さな会議をして、議論をすとか思いを伝えるということを練習して将来的には施設の存廃など地域課題として大きいものを取り上げたい。

A委員：ファシリテーション技術を届けることで、その活動が円滑になるという間接的な支援と、そもそもこの団体そのものがいろいろまちづくりについて発信をしていくことととか、相乗効果の行き先がいろいろある気がするので、その辺を整理して活動していただくと分かりやすくなるかと思う。

団 体：まずは、ファシリテーションのマインドがあまりないというか、任せっぱなしや言いっぱなしの会議をよく見るので、そうじゃなくてみんなが会議をつくるんだという気持ちを広げるとするのが私たちの一番の目的と思うので、そこをしっかりとやって、課題については他の団体のサポートという形で入っていくのが分かりやすいのではないかと思う。

《行政提案型協働事業》

○町内会・自治会の「LINE公式アカウント」普及サポート事業

●申請事業プレゼン

(市説明)

・事業提案の背景として、市では、町内会のデジタル化推進に取り組んでおり、令和4年度はICT指導者養成講習会と、実際に町会活動でデジタルを導入するモデル事業を行った。モデル事業では、若い世代が集中して住む新興住宅地をモデル地区とし、会員の

情報共有のツールとして LINE 公式アカウントを使用して、今年の 4 月から運用を開始している。

今年度は多世代が住む地域で行う予定。モデル事業終了後は町内会離れが進む若い世代に向けた有効な情報発信ツールとしてニーズがある町内会に広がって町内会活動の参加者の増加、活性化につながってほしいと考えているがデジタル技術の普及には外部からサポートする支援団体との連携が必要なため、今回の行政提案をさせていただいた。

(団体説明)

- ・昨年度から町内会のデジタル化モデル事業の方に協力させていただいている。
モデル事業では導入の段階までは支援できたが、実際はその後もこういうところがうまくいかないとか、どうしたらいいかという相談を多々いただいているので、そこを LINE 公式アカウントの導入後のサポートという形で支援し、課題を洗い出して次の段階に広げて行きたい。また、LINE 公式アカウント自体の機能や使い方がわからない町内会の方が多くいると思うので高齢の方にも簡単に説明するような資料を作成して、さらに広く多くの方に理解してもらえそうな取組みを行いたい。

● 質疑応答

B 委員：会場使用料として参加費 1 万円だが例えば会場使用料なくして参加費下げることでも広く参加できるのでは。

市：市が主催するものではないので、会場使用料は発生する。今後のためにも、実費分については町会側で負担をして市民活動団体と連携をして進めていくという形がいいと考える。ただ、町会が参加する講習なので、町会館かもし無料で利用できるということであれば、参加費もなくなると思う。

F 委員：今年度のモデル地域は具体的に決まっているか。

市：祝津町会さんが手あげして、もう 1 団体が検討中。

F 委員：祝津町会さんについては町会員への周知をしての手挙げなのか。

市：そこまでではなく役員レベルだと思う。

F 委員：町会の会員の方の同意が得られないと、役員さんだけ一生懸命頑張ってもうまくいかないのでは、今後の進め方に注意が必要だと思うが。

市：今回の多世代地域でのモデル事業は、従来の回覧板等をやめる訳ではなく、従来の回覧板はそのまま、プラス α で、例えば明日清掃やりますよなどお知らせをするというようなイメージなので、従来の方法がいいという人にとって不便にはならないと考える。

E 委員：自分も天気が怪しい時にラジオ体操やるかやらないかとかを LINE でくれたらいいなと思うので、ぜひ町内会で導入してほしいと思うが、町会によって温度差があるか。

市：窓口になる方は、町会の役員さん達なので実際に LINE を使ったことないとか、スマホも持ってないとかっていうことになるので、難しい部分はあると思うが、ただその中で自分たちにできるのならやってみようかと言ってくれるところもあるので、そこにマニュアルなどを作って役員会で共有して見てもらえると話が進みやすいのかな、という印象はある。

C 委員：自分の周りでも非常に乗り切った人と、そうでない人と意識の差があるところ。

今回はサポートということでどうしたらいいとか、どんな形なのかなということがわからない段階の役員にも、さらには町会の人たちのみんなに広げられるもので、方向性としては非常に重要なものでありがたいと思う。

A委員：行政提案型ということで、行政の方は、どのようなニーズに基づいてこの提案をされたのか、受けた団体の方はその行政からの提案に、やはりこのニーズがあると思ったのは、町会のどういう現状を把握した上で、その行政からの提案に賛同したのかお聞かせ願いたい。

市：去年、モデル地区となったところはほとんどが現役世代の地区だが、事業実施前にアンケート調査を全世帯 63 世帯に対して行った所、9 割が回覧板ではなくデジタルの情報共有がいいという回答だった。一方で町内会の活性化を考える上で、若い世代の町内会離れが進んでいるという現状があり、もっと町内会の情報発信が頻繁にできたり、オープンな印象が受けられたら、もっと理解が進むのではないかなというニーズを感じて、今提案に至った。

団体：ニーズに関しては市と共通認。その上で自分も町会に属している者として、先ほど委員からもお話があったように、今日の天気で盆踊りはやるのかやらないのかみたいな時に連絡があることで安心して地域の町会の取組に参加できるメリットがあるということを実感しているところ。また、町会の方でも会議記録などを拝見すると理解の温度差は感じているので、そのあたりしっかりと説明させていただくことで、より理解が進んだり、デジタルを敬遠またはあまりいいイメージを持たれていない方に対しても取組を進めていけるのではないかと思います、今回手を上げさせていただいた。

A委員：ぜひ問題を抱えているところについて、当事者の方に主体となって参加していただくという方向を模索していただきたい。

E委員：室蘭市内のスマートフォンの所持率というか、使えないけど持っている人というふうに含めるとかなりいるものか。

団体：室蘭の状況は把握していないが、世間一般では既に 7~8 割がスマートフォン。今までのガラケーと呼ばれる電話自体が製造しなくなってきているというところで否が応でも更新しなければいけないというような流れがあるので、より今後進んでいくという今過渡期のタイミングだとは思っているので、このタイミングで早く仕組みを入れることが重要と考える。

○墓地（舟見町、東町）環境美化活動のサポート

●申請事業プレゼン

（市説明）

- ・市営墓地である舟見町墓地と東町墓地については、現在行政による維持管理を行っているが、行政のみの年間で限られた回数草刈り、伐木等の維持管理では利用者の方が望む管理水準まで届いていないのが現状。そうした背景から、墓地環境美化が行政課題となっており、そのサポート事業について募集を行ったところ、これまで墓地内の草刈りや伐木を行っていただいていた有志の方々を中心とした墓地環境美化活動のサポートをする会から応募があったもの。これまで有志の皆様が作業に使用していた草刈り用の機器類は家庭用であるため、業務用の高精度の機器に比べて刈り込みの速度とか切れ味

の性能が低い場合が多々あることから今回の補助金によりより高精度の機器が用意できれば短時間での効率的で広範囲の伐採作業等が可能になって、行政との連携により、より良い墓参環境づくりに寄与いただけるものとする

(団体説明)

- ・一般的にはお墓というのはあまり気持ちの良い場所じゃないという感覚がある。しかし一昔前にトイレ問題というものがあったが、トイレって汚い臭い、だから不潔でいいんだという風潮が今ガラッと変わってきれいになったように、お墓の方も気持ちいい環境にしないといけないと考えている。以前から少しお手伝いで墓の草刈り等行っていたがやはり家庭用の草刈り機だと相当な負荷がかかり機械が壊れてしまった。その際に今回の行政提案型事業の話を知って今回応募した次第。

●質疑応答

D委員：事務局の方に質問だが、行政提案型は単年度のみのものであるのか。

事務局：行政提案型事業は提案課の考え方によるが最長5年まで継続できることになっている。今回提案した2事業については最長の5年間継続する予定。

D委員：では団体に質問だが、構成メンバーが5人程とのことだが、草刈りなどはとても労力のかかるものだと思うが、今5年間という話もあった所だが継続していくことは可能なのか。メンバーも限られた人数のようだが。

団体：墓地全体をやる訳ではなく、例えば墓地内にお地藏さんが設置されているのでその辺りと共用の限られた場所での実施を予定している。

なかなかメンバーを増やすことは難しいのでとりあえずは現状でやっていくつもり。

市：行政提案ということで提案させてもらっており、賛同していただける方を募るのも行政も協力していきたい。

団体：付け加えると、あのお墓の一体は避難通路になっているが特に防災の方で何か整備してくれる訳でもないのでもこれまでも町内会と少なくとも逃げ道だけは確保しておこうということで草狩りをしたりしているので今後も一緒にやっていきたいと思っている。

C委員：事業名は墓地（舟見町、東町）環境美化サポートとなっているが、今回応募の皆さんは舟見町の方々だと思うが東町の方はどうするのか。

市：今回応募の団体名簿に記載の方々には舟見町の方なので、舟見町の方での活動で考えている。東町の方にも有志でやっていただいている方がいるが、現時点では事業参加にまでは至っていない状況。器具を必要としているという同様の課題を抱えていることから今後協働事業に参加いただけたらとは考えている。

東町の方については全体として協働事業ではあるが主として市の方で調整等行いたい。

E委員：この活動は、まち「ピカ」パートナーとは一緒にならないのか。

事務局：まち「ピカ」パートナーでは一般的な草刈機の貸し出しも行っているが、墓地の場合はもう少し専門、専用の道具が必要になることから、まち「ピカ」の用具の貸し出しで対応できないので今回の提案となっている。ただ、今後事業が軌道に乗った際には、燃料費の助成もまち「ピカ」で行っているのでも事業を統合することも視野に入っているところ。

C委員：舟見町と東町は墓はどのくらいあるのか。

市：舟見町の方が約 1,000 くらい、東町が 50 くらい残っている。

元々、移設の制度があつて、全て望洋台に統合するという話だったが最近では全部の統合は不可能な見通しのためその制度を廃止する方向であり、これからも存続する墓地ということに明確になったので、改めて美化活動が必要になっている実態がある。

A委員：これまで舟見町モトマリ墓地の自治会が存在したことはあるか。

団 体：自治会ではなく、モトマリ墓地をきれいにする会というのはあつたようだ。お墓の維持費として 2 千円くらい集めてきれいにしていた時期があつたが 10 年くらい前からは活動していない状態。

A委員：行政が整備した墓地というのがあるが生活の中で昔から続いている墓地というものもあるので、地域で守っていくところと行政がサポートするところのバランスをうまく探っていっていただきたい。

F委員：支出に保険料が計上されていないが、チェーンソーでの作業など非常に危険が伴うと思うので保険は必要だと思うが。

市：活動場所である墓地は市の土地なので保険は市でかけている賠償保険を適用することになる。

【閉会】